

## 言語社会研究科 博士論文要旨

著 者 比嘉徹徳  
論 文 題 目 フロイトの情熱 ―精神分析運動と芸術  
学位取得年月日 2011年2月9日

本研究は、ジグムント・フロイトの精神分析を「運動」ならびに「芸術」という観点から捉え直す試みである。フロイトが彼の精神分析を運動として展開したのはなぜなのか、また、フロイトが精神分析の制作に際して、芸術を参照していることの意味を一貫して考察している。フロイトが精神分析運動に傾けた「情熱」あるいは「欲望」とは何であったのかを、5つの章を通じて検討している。

今日の視点から見て、既に精神分析と呼びうる実践を開始し、そして著作を公にしていたフロイトが、改めてそれを「運動」として（再び）始めようとするとき、どのような意図あるいは戦略があったのか。精神分析運動は、団体（協会）を作り、定期刊行物を発行することによって精神分析への理解を深め、それを発展させるだけでなく、その先には精神分析家を再生産することを目指していたと、さしあたって述べることができる。しかしながら、精神分析という営みとフロイトという個人の分かちがたい関係は、精神分析運動の原動力としてのみならず、同時に困難としても浮かび上がってくる。

アンリ・エランベルジェは、『無意識の発見』で、精神分析を歴史的パースペクティブの中に位置づけつつ、同時にそれがフロイト自身の「創造の病い」を反復する構造を持っている点で、他の精神療法と根本的に異なると述べている。本論考は、様々な角度からフロイトのテキストを検討しているが、この反復の構造をいかに読み解くかを基点にしている。

第1章では『精神分析運動の歴史のために』を祖上に載せた。フロイトがこのテキストで行っていることは、まさに彼自身の体験を辿り直すことが精神分析であることを遂行的に示すことである。「体系的」な記述によっては精神分析とは何かは語りえず、それが生まれてきた歴史を見なければ理解されないとフロイトは述べる。このテキストが書かれたのは、精神分析運動に早くも大きな決裂が生じた第4回の精神分析協会ミュンヘン大会(1913)の直後であり、フロイトは余りに早い運動の総括をそこで下している。

フロイトは、彼自身の経験と結びついた精神分析の歴史を記述する。このテキストは、何より精神分析運動の「主体」を構築しようとしている。精神分析を担いうる「主体」の起源をフロイトは語るが、これ以上遡り得ない起源にいたって、精神分析という営みが拠って立つ「権威」が運動の危機において焦点化していることを考察した。運動を支持しそれを担う者たちが増していく中で、やがて組織内にフロイトを囲む「秘密委員会」が結成される。それは、精神分析運動の拡大によって、精神分析が変容していく危機を察知した者たちが、「フロイトの精神分析」を擁護しようと組織したものであった。そこでは「権威」に代わって、「大義」という言葉でこの運

動の行方が論じられていることを本論考は追跡した。精神分析運動が依拠すべき「権威」あるいはそれが語る「大義」は、フロイトの自己分析に帰っていく。フロイトの体験は、「科学」たろうとし、あるいは制度化しようとする精神分析にとって、取り除くことのできない「染み」のようなものとしてある。フロイト自身の体験が、精神分析を生み出すと同時にその科学としての洗練に抵抗するのである。

第2章では、フロイトの反復概念を精神分析の技法論を通して検討した。フロイトは、自分を超えて精神分析が生き残ることを欲していた。フロイトは運動の進展していく中で、精神分析のセッションについて記述し直すことで、これから精神分析運動に加わるであろう未知の他者たちに呼びかけている。転移という基本概念の彫琢において、とりわけ反復の捉え方が次第に変化していくことをここでは論じた。すなわち、病因となった出来事を想起し言語化することが、治療の分析的治療の根幹だと見なされている一方で、分析空間で起こることのすべてが、それが実際にあったことか否かとは別に、「反復されたもの」として分析が扱う対象となる。分析空間という、患者自身とその生の間の「中間領域」で起こることは、にもかかわらず真偽を超えた「アクチュアル」な事態として真剣に検討される。フロイトはセッションの方法を具体的に述べることによって、職業としての精神分析がいかなるものであるかを詳述しているが、フロイト自身の「症状」が回帰することによって、その目論見はうまく果たされない。すなわちそれは、治療の成果を超えたところにあるフロイトの「真理」への執着である。本論は、フロイトによるこの精神的な真理への執着が、先に見た科学と制度化に精神分析が抵抗する要素であることを以下の3つの章で明らかにした。その中で、最初期の『夢解釈』(1900)、『ミケランジェロのモーセ』(1914)、最晩年の『モーセという男と一神教』(1938)を主要テキストとして取り上げた。

心的なものの「真理」に到達するために、よく知られているようにフロイトは自由連想を用いた。『夢解釈』でフロイトは、自由連想をシラーの詩作の態度と結びつけて説明しているが、芸術は精神分析にとって単なる模範やアナロジー以上のものとしてある。ニーチェが引用するシラーの詩作の態度と同様、フロイトにとって夢がいかに映像を作り、ドラマ化するかが、その「夢作業」の解明において中心の問題となっている。先行研究において、「夢作業」は、隠喩や換喩といったレトリックに還元されて理解される傾向があるが、フロイトが映像化とドラマ化の視点を強調していることの意味を第3章で考察した。

「夢の願望充足」説は、快の体験の反復を目指しているとフロイトは論じているが、同時に映像化し、演劇化することそのものが快であるとも見なしている。その際、問題になるのは、模倣の願望である。ここで夢を根源で動かしている力は、子どもの遊びと同じものだとフロイトは考えている。夢ならびに遊びにおけるこの模倣という契機—現実—に仮託しつつ現実とは別の世界を作ること—に、フロイトは、智者オイディプスの姿を重ねる。すなわち、幼児における模倣の欲望は、「知識欲動」によって駆動されており、それはスフィンクスの謎を解いたオイディプスを動かしていたところのものである。

第4章では、フロイトのパラノイアについての考察と精神分析の方法論を比較検討した。フロイトがダニエル・パウル・シュレーバーの『回想録』を読んで書いたパラノイア論—それは『運動史』の時期と重なっている—は、フロイトが精神分析を開始した地点でのフロイト自身のパラ

ノイア問題を暗示している。フロイトはヒステリーの性的病因論という彼の主張によって、同僚ヨゼフ・ブロイアーと決裂したが、彼はフロイトの考えを、すべてを1つの原因に還元する「科学的パラノイア」だと断じた。その一方でフロイトは盟友ヴィルヘルム・フリースが彼に書き送った諸々のアイディアを最終的に「パラノイア的」とであると退けていた。運動の気運が盛り上がっている中で、フロイトはフェレンツィに対して、「パラノイアが失敗するところで私は成功した」と書き送っている。しかし、精神分析の方法に関してパラノイア的なものは付きまとい続けていると本研究は考える。

そのシュレーバー論で、同性愛の否認がパラノイアの妄想を生み出すとフロイトは論じていた。投影のメカニズムによって、愛する同性が迫害者としてパラノイア患者を脅かす。他方、人々の振る舞いの細部や事物の微かな徴候から遠大な帰結を引き出すパラノイアの思考過程もフロイトによって論じられている。このパラノイア的と呼びうる傾向は、精神分析の方法との著しい類似性を持つ。フロイトが彫像の細部の異常なまでの掘り下げを行った『ミケランジェロのモーセ』を検討することで、精神分析がパラノイアからどう距離を取ろうとするのかを考察した。フロイトがミケランジェロの彫像から読みとったのは、歴史上のモーセとは異なる非実在のモーセであった。そしてフロイトは、その最晩年に彼自身が聖書上の記述とは異なるモーセを描出することになる。

『モーセという男と一神教』は、「エジプト人モーセ」やユダヤ人によるモーセ殺害など、その内容が様々な反応を引き起こしてきた。多く論者は、このテキストの読解の鍵が、フロイトの生活史の中にあるとしてきた。それに対して本研究では、フロイトが「歴史小説」の名のもとに、まさしく精神分析的な「再構成」という方法を用いて一神教の歴史にアプローチしていることを論証する（まさしくそれは『ミケランジェロのモーセ』で行ったことを明確な意志を持って反復することであった）。ここでフロイトは、再構成という方法を用いて「歴史的真理」に接近しようとする。それはもはや「本当らしくはない」、構成されたフィクションとしての「真理」である。さらに、この再構成という作業によってフロイトが「ユダヤ的なもの」をどのように描き出しているかをこの章で検討した。フロイトにとっての一神教は、欲動断念を強いる倫理的な宗教であり、それを通じて高度な「精神性」が獲得される。そのとき、快（感覚性）の断念の中に、フロイトは特殊な快である「陶酔」が含まれていることを指摘しているが、この陶酔とはどのようなものなのか。ここでフロイトは、イェルシャルミが論じているようにユダヤ人の特殊性を論じようとしているのではなく、ユーモアにおいて体験されるものがまさしく「陶酔」とであると論じていることから理解されるように、欲動断念の果てのある心的機制を解明しようとしていた。

以上、5つの各章の考察を通じて、本研究はフロイトの精神分析がなぜ運動としてあるのか、そしてその芸術の参照がいかに不可欠の重要性を持つかを明らかにした。また、フロイトと精神分析という営みとの間にある特異な構造を様々な角度から厳密に検討することによって、精神分析の持つ特異性を描き出した。この特異性の核にあるもの、すなわち、フロイトが精神分析運動に傾けた「情熱」は、精神分析による治療の制度としての確立でも、他方で彼がしばしば訴えるその科学性の希求とも異なる、「陶酔」の経験を反復するよう呼びかけるものであった。